

令和4年度

まちづくり推進部 雄物川地域局の方針書

局名	まちづくり推進部 雄物川地域局
局長名	佐藤 耕樹

1. 局の使命(ありたい姿)

地域の強みを発掘、育成し、地域に「元気」を創り出します。

2. 局の抱える課題(現状)

- ・コロナ禍により停滞しつつある地域活動に活気を取り戻すことが必要
- ・少子高齢化に起因する地域づくりに関わる組織の弱体化、地域活動の担い手不足
- ・職員の資質向上、地域課題解決に積極的に関わりあおうとする職員の育成

3. 今年度の『スローガン』

チームで実践『お・も・い・や・り』

4. 今年度の方針

- (1) 地域資源の適正維持と有効活用による賑わい創出を図ります
- (2) 地区交流センター活動を支援し、市民が主役のまちづくりを推進します
- (3) 市民サービスの向上のため自ら考え、行動できる職員・職場の実現を目指します

5. 今年度の重点取組項目

(1)	実現したい成果	地域資源の適正維持と有効活用による賑わい創出
	取組内容	・道路、河川、公園、建物等公共施設の適正な維持管理と今後解体予定の老朽施設の協議を進めます。 ・中央公園・木戸五郎兵衛村や河川公園・鍛冶台いこいの森を有効活用し、地域の元気を創出する事業を推進します。
(2)	実現したい成果	地区交流センター活動の支援と市民が主役のまちづくりの推進
	取組内容	・地区会議、地区交流センター事業を柱とした地域づくり活動の推進、防災機能、共助組織の拠点機能の構築・充実を図ります。 ・地区担当職員の積極的な参加と、地域づくり活動補助金等の制度周知・支援に努め、地域コミュニティ醸成に貢献します。 ・各種イベントや活動の延期、自粛等により縮小した地域活動の回復を支援します。
(3)	実現したい成果	市民サービスの向上のため自ら考え、行動できる職員・職場の実現
	取組内容	・職員個々の業務・接遇スキルの向上に努め、親しまれる職場づくりを推進します。 ・職員の行動指針と業務改善を常に意識しながら業務を遂行します。 ・より精度の高い避難行動要支援者の把握に努め、災害時の避難支援体制の基盤づくりを推進します。

6. 方針に対する年度上期(4月～9月)の取組状況

(1) 地域資源の適正維持と有効活用による賑わい創出

- ・除排雪の業者委託について雄物川地域内の建設業者に対して受注希望などのアンケート調査を行い、その結果を受け今冬に向けた委託路線の検討を行っている。
- ・雄南のびる館を9月末で廃止した。今後の活用方法を財産経営課と協力しながら決定していく。
- ・河川公園はデイキャンプ場として利用が増えており、特に土日は家族連れで多くのデイキャンパーたちで賑わっており、鍛冶台いこいの森も含め来訪者に危険がないようまた不快感を与えないよう環境整備と維持管理をしっかりと行っている。

(2) 地区交流センター活動の支援と市民が主役のまちづくりの推進

- ・地区交流センターでは、十分なコロナ感染対策を工夫して、地域の活気を失わないよう地区住民を対象とした各事業を展開している。
- ・「雄物川地域地区会議打ち合わせ会」を開催し、地区担当職員の参加率向上及び補助金などの制度周知・支援に努めるよう依頼。各地区会議の事業(ハード・ソフト)は計画どおり実施。
- ・コロナ禍でここ2年間は地域に賑わいを創出する様々なイベントが開催できなかった。今年度は6月29日に河川公園をメイン会場に駅伝大会の開催、7月17日には中央公園で「おもフェス2022[Jamaican Music Festival]」が開催され、約1700人の来場者で賑わった。「は・は・は祭り」は実行委員会主体で行われてきたが、商店街振興会も解散され、今年度は開催しないことに決定された。

(3) 市民サービスの向上のため自ら考え、行動できる職員・職場の実現

- ・今年度の7月以降は、夏季休暇の取得に加え、新型コロナウイルス感染症の影響により業務を休まざるを得ない職員が増加し、お互いの業務をカバーしながら継続している状況であった。地域局行事、市の行事やワクチン接種業務従事などで休日出勤の多い中、職員のケアも必要と感じられた。
- ・避難支援体制については、ハザードマップ上の早期避難が必要なエリアに居住する要支援者(20人)への戸別訪問により、支援者とのマッチングを行い、個別計画の作成を行った。

7. 年度下期(10月～3月)に向けた課題と取組方針【ギャップと対策】

(1) 地域資源の適正維持と有効活用による賑わい創出

- ・地元業者への除排雪作業委託の実施と除排雪状況確認
- ・来年度以降廃止予定としている施設について、利用している関係団体と代替施設等の協議、住民説明の準備を進めていく。
- ・2月開催予定の木戸五郎兵衛村でのかまくらに向け関係課と連携し、観光客へのおもてなしと地域の元気を創出する。

(2) 地区交流センター活動の支援と市民が主役のまちづくりの推進

- ・地区交流センターとの連携により水害多発地区において水害行動訓練を行い、地域内での避難手順を確認する。
- ・今年中止となった「は・は・は祭り」については今後実行委員会等の中でどのような運営をしていくのか検討を進める。

(3) 市民サービスの向上のため自ら考え、行動できる職員・職場の実現

- ・担当職員が不在でも周りの職員がカバーしながら市民サービスの質は落とさない方法を自ら考え、行動していく。過去のヒヤリハットとその対応策を検討し、共有することで業務改善に取り組む。
- ・避難支援体制については上半期の取り組みを継続しながら、民生委員と連携し、管内全域の要支援者の支援体制の構築を進めていく。

8. 総括(取組みの結果と成果、次年度に向けた課題【結果と成果】)

(1) 地域資源の適正維持と有効活用による賑わい創出

- ・アンケート調査に基づき、除雪の全路線の2割ほどを地元業者に委託した。実績をもとに課題を洗い出し、次年度以降のシーズンにつなげていく。
- ・つきの木館について、体育館利用団体には状況説明、公民館として利用している地元集落には説明会を行った。今後も地域に丁寧な説明を行いながら実施していく。また、その他の解体済みの施設を含め利活用の方法について検討を進める必要がある。
- ・長寿命化を図る施設や老朽化した施設については、市全体の計画とも整合性を取りながら検討を続けていく必要がある。
- ・3年ぶりに開催された木戸五郎兵衛村かまくらは地元関係者の実行委員会が主体となり、町内様々な団体の協力を得て実施された。海外、関西圏からの来客も多く、コロナによる移動制限解除による影響、大阪でのPRイベントの効果が感じられた。今後、木戸五郎兵衛村、各公園の年間を通した利用促進方法を探り実行に移していく。

(2) 地区交流センター活動の支援と市民が主役のまちづくりの推進

- ・各地区ごとに特色あるセンター事業を開催しており、その事業支援を行った。一例として、里見:「里見いどばた会議」として住民の要望課題の掘り起こしを目的にワークショップを開催、福地:「秋田の気象災害と防災」をテーマに防災講演会を実施、館合:雄物川消防支団と合同で「水防行動訓練」を実施 など
- ・コロナ禍で中断されていた各種イベントや事業について感染症対策をしっかりと行いながら再開することができた。「第49回雄物川駅伝競走大会」、「おもフェス2022」、「雄物川地区消防訓練大会」など
- ・「は・は・は祭り」実行委員会を開催し、次年度再開の意見でまとまっており、開催・運営方法を見直したうえで準備を早期に整えていく。
- ・地区交流センター設置条例制定に伴い、生涯学習センター事業の実施方法の見直しを検討していく必要がある。

(3) 市民サービスの向上のため自ら考え、行動できる職員・職場の実現

- ・今年度は第2、第3四半期で新型コロナウイルス感染症の影響で担当職員が不足する事態となったが課を越えた連携、職員間のカバー、工夫により来庁者等に不利益を生じないよう対応を行った。
- ・避難行動要支援者で支援者がいない者について訪問等で状況確認し、249名すべての方についてマッチング等を行い、より精度の高い個別避難計画を策定した。継続して見守り支援や関係部署との連携により必要な支援を行っていく。